

読賣新聞

2005年(平成17年)10月18日 火曜日

人世界が舞台

着物の袂やひざもとから手品のように人形を飛び出させ、腹話術スタイルの落語で物語が始まる――。

師匠の笑福亭鶴笑さんとともに、英国の小中学校、病院、市民会館を訪れ、英語で公演してきた。子供たちにはやさしく日本文化を紹介するのが狙いで、これまで公演した施設は50か所をこえた。

今年からは、ひとりでロンドン市内の漫才劇場(コメディークラブ)の舞台上に立つようになった。やんちゃな忍者の人形ニッキーを相棒に、若者から中高年まで幅広い年齢層の観客を沸かせている。

「幼年時代からお笑いは好きだったけど、コメディアンになれるなんて考えて

もみなかった。将来は普通に就職すると思ってました」

幼年時代から家族の盛り上げ役だった。毎年親戚一同で開催する新年会では、司会役だった。手品・寸劇、漫才、ちよっととした出し物も披露した。

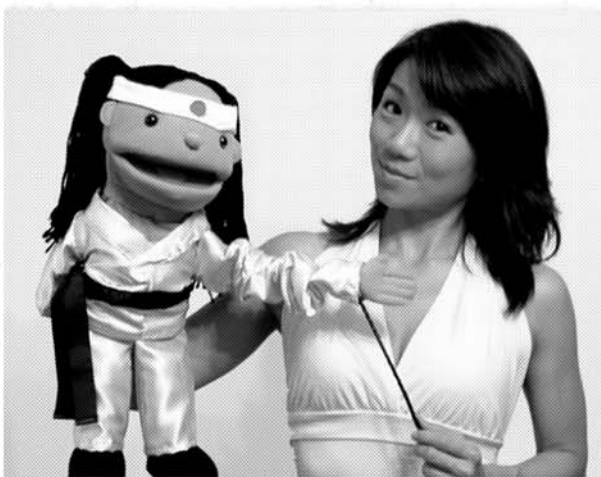
短大卒業後は、警察の交通安全教育部門に就職。このとき、職場で腹話術を学んだ。子供たちに、交通ルールなどを楽しく説明するため、地元の小学校などを回った。

英語を習得するため、退職してカナダへ1年留学した。帰国後、アナウンサースクールに通い、テレビやラジオで司会やナレーターの仕事始めた。1998年にシンガポールの国営放

世界に挑む腹話術落語

■ コメディアン

笑福亭 笑子さん 36



送局で、英語と日本語を話すアナウンサーとして働くために同国に移住。ラジオ番組の取材を通じて、同国で活動していた師匠と出会い、人生が一転した。

一デビュー 咲き遅い出会いと師匠

「夢はかなえるためにあるんや」。その言葉に導かれて、師匠の公演を見に行っていた。人形を使ったオリジナル落語に、老若男女が「ワーツ」と歓声を上げた。「世

世界各国からプロのコメディアンが集まるロンドンの舞台は、思った以上に難関だった。漫才劇場に初めて出場したときは、容赦ないヤジを飛ばされた。その意味も理解できず、地下鉄の中で泣きながら帰った。

「日本人だし英語が母国語じゃないから」と一度はあきらめかけたが、芸人仲間引き止められた。「もっとひどいブラインクだつてある。アヤコは日本人の女の子でうらやましい。お客さんにすぐに覚えてもらえるじゃないか」

「場数を踏むことが大切」という師匠の言葉に従い、がむしゃらに公演の機会を探った。大道芸人が集まるコペントガーデンはもちろん、雪の降る道ばたで公演したこともある。

略歴 本名・小野綾子。神戸生まれ。神戸山手女子短期大学教養学科卒。10月30日から、英国人コメディアンをゲストに招き、腹話術や日英の漫才、落語を紹介する笑亭「日英寄席」を毎月ロンドン市内で開催予定。詳細は、ホームページ www.ryakoo.com

うとすると、道行く人に声をかけて客寄せをしてくれ。」「せっかく集まった人がおびえて逃げってしまうですよ。でもその気持ちがあるれしかった」と笑う。

今では、狙った笑いがずべつても、そのことすら冗談にする余裕ができたという。英国人は、即興の冗談が大好き。うまく笑わせたとときの気分は最高です。最近ようやく、自分の居場所ができたと感じている。当初は2、3年の滞在予定だったが、なんとか夫を説き伏せて、あと10年は住む予定なのだという。(ロンドン 鈴木透子)